

韓国高麗時代の石造弥勒像の特色に関する一試論

灌燭寺の石造菩薩立像を中心に

* 金丸 和子

韓国には現在、「弥勒」と呼ばれる石仏が各地に数多く存在する。そこには毎日御参りに来る人々がいて、大切に信仰され、非常に身近な存在であるようだ。近年安置するための堂宇が建てられつつあるが、その多くは屋外にあり、その前に莫塵などを敷いて礼拝している。ミロクと呼ばれてはいるが、造立当時から本来の尊格が弥勒であったかどうかは確実ではなく、明らかに大日如来であるというように、もとは全く違う尊格であったことも往々にしてある。また、棒状の石にしかないみえないほど摩滅してしまっているものもあるなど、現状から石造弥勒像を研究するには多くの困難がある。

そのような石造弥勒像の中にあつて、ほぼ完全な形で伝わり、人々に「恩津弥勒」と呼ばれて親しまれているのが、灌燭寺の石造菩薩立像である。日本における奈良の大仏のように、誰でも知っている大きな仏像である。例えば、韓国を紹介するビデオにも、石窟庵とともに代表的な歴史的観光名所として扱われている。また、我が国の昔話にある「ネズミの嫁入り」に似た話も伝わっている。それは、

「昔あるところにネズミがいました。ネズミには可愛い娘がいて、娘には立派な婿が欲しいと思っていました。まず、ネズミがいつも怖いと恐れている猫のところへ娘の婿になって欲しいと頼みに行ったら、猫は犬の方が怖いと言いました。そこで次に犬のところに行ったら、犬は人間の方が怖い、人間が一番偉いと言いました。人間のところへ行くと、人間より偉いのはお日さまだと教えられ、お日さまのところへ行くと、お日さまも雲にはかなわないと言われました。雲には風の方が強いと教えられ、風に聞くと、風が吹いてもびくともしない恩津弥勒の方が強いと言われました。恩津弥勒には、足の下に穴を掘って私を倒してしまうネズミには負けずと言われ、結局、娘の婿にはネズミを選びました」(注1)と、いう話である。

この小稿は、それほど人々に親しまれている恩津弥勒の考察を手がかりに、韓国高麗時代の石造弥勒像の特徴の一端を明らかにしようとするものである。

* Kazuko KANAMARU 日本伝統文化学科 (Department of Japanese Traditional Culture)

一、灌燭寺の石造菩薩立像の概略

灌燭寺は韓国忠清南道論山市恩津にある。扶余から益山方面あるいは鷄竜山、金泉へ続く街道筋に位置し、その道を見守るように巨大な石仏が立っている（図1、図2、図3、図4）。



(図1) 灌燭寺遠景 (図中央に石造菩薩立像の頭部がみえる)



(図2) 灌燭寺菩薩像 横よりの眺望

灌燭寺の石造菩薩立像は、総高一八・一二メートルの巨像であり、宝冠とその上に二重につけられた板状の冠（冕冠状の宝蓋）を合わせると、頭部が全身のほぼ半分を占める非常にアンバランスなプロポーションをしている。背面はほとんど彫刻せず、正面観に見られる巨大さとは異なり、奥行きも浅い。下膨れの大きな顔に大きな目鼻、口を



(図4) 灌燭寺菩薩像背面



(図3) 灌燭寺菩薩像正面

配し、その上に背の高い宝冠とさらに八角に整えた台に板状の冠（宝蓋）をのせる。宝冠部分は現在粗彫のままになっているが、四面に三個所ずつ金具を取り付けた痕跡があり、もとは金属などの別材で宝冠が取り付けられていたとみられる。ほぼ腰の部分で石材は上下に分れ、両腕も別石を寄せてある。体部にはほとんど抑揚がなく、U字形の衣文を前面に陰刻する。両肩を覆う着衣の形式は、上半身を裸形にする

通常の菩薩像とは異なる。手は体部に密着するようにして、右手は胸前にあげて蓮華枝をつまみ、左手は下向きに第一指と第三指を捻ずる。足は手と同様に量塊的で抑揚がない表現である。台座はとくに造らず、自然石の上に立つ。本像は、巨大で大まかな造りで、近くで拝すことを期待していない造形のようなのだが、髪際は縁飾りのような連続円弧で表し、耳には髪束を三段にかけ、胸の部分の変化に富んだ衣の折り返し部や裾で足に纏いつくように波打った衣文など、細部にも華麗な石彫技巧を発揮している。

本像については高麗時代を代表する石造仏として、多くの概説書にも取り上げられている。その評価は、すべて「土俗的」、「地方性」という語でくくられていると言っても過言ではない。例えば、黄寿永氏は『韓国の仏像』（注2）で、「高麗に入って石造巨像の造成は、ついに忠南論山灌燭寺観音像を生み出したのだ。規模から見て一石材で造成することが不可能なので、巨岩を積み上げて高さ一八メートルの巨軀を造る方法を用いた。したがって、体部の均整を得られず、相好もまた土俗的な容貌をもって、学者によっては酷評が加えられているが、我々の古代彫刻史のひとつの記念碑的な作品であることはまちがいない。・・・」と述べた。日本の美術全集の解説では、「最大の灌燭寺像は、『灌燭寺事蹟碑』の記述から僧慧明によって高麗時代前半に造立されたことが知られる点で注目されるが、今まで取り上げてきた作例に見られるような彫刻作品らしい身体各部の把握は失われ、むしろモニュメントとしての存在感そのものに意義があるといえよう。」（注3）とある。最近でも崔聖銀氏が「本像は十世紀後半の忠清地方で流行していた彫刻様式の土俗性を示す作例のひとつとされる。」（注4）と述べている。各氏とも、記念碑的な作品としては評価する

が、美的に優れた作品だとは述べていない。

そのような状況の中で崔善柱氏は、「灌燭寺菩薩像は光宗代に中央から派遣された僧慧明によって造られたもので、中央と密接な関係があり、当時の社会的、宗教的な背景が十分反映した像であり、この像だけが持つ独特な時代の造形美をもつ」と述べ、積極的に本像に美的な位置づけを与え評価した（注5）。かつては灌燭寺菩薩像に関する美術的な評価は決して高くはなかったが、近年再評価の気運もあるようだ。

この小稿では、崔善柱氏がいみじくも「独特な時代の造形美」と述べた灌燭寺石造菩薩像をはじめとする高麗時代の石仏の特色を考察しようとするものである。したがって、この小稿での考察は美術的価値に及ぶものでもなく、様式的考察を試みるのでもなく、黄寿永氏が尊名を観音菩薩であると述べたように、尊格が一般によばれているように弥勒か、あるいは観音かという図像的な考察をするのでもない。灌燭寺石造菩薩像に代表されるように、高麗時代に巨大な石仏が多く制作された背景の一端を探ろうとする試みである。

二、灌燭寺事蹟碑

灌燭寺菩薩像についての記録は、朝鮮時代に書かれたものももっとも古い。これは建立当時の記録ではなく、一次史料ではないのでどの程度史実を伝えているかはわからないが、少なくとも朝鮮時代の灌燭寺のようすがわかる。「灌燭寺事蹟碑」（以下、事蹟碑）と『新增東國輿地勝覽』である。

灌燭寺事蹟碑は、朝鮮英祖十九年（一七四三）につくられ、龜趺にのる石の側面に文章が書かれている（注6）。そこには、①灌燭寺の

成立の事情、②仏像のようす、③灌燭寺の名の由来、④灌燭寺の仏像の逸話（靈験）、⑤修理の記録、⑥寄進者の名、などを記している。

①では寺の草創に関する説話を次のように記す。高麗光宗十九年、沙梯村の女性が盤若山に山菜採りに行ったら、子どもの泣き声が聞えた。見に行くと、大きな石が地上に湧き出るところだった。それを聞いた夫が県に報告し、それが光宗に届いた。光宗は仏像を造れということだと判断し、慧明に造仏を命じた。翌年からおよそ三十七年かけて、慧明は工匠百余人を率いて制作に当たり、像を完成させたが、仏像が大きすぎて立ち上げることができなかった。慧明が沙梯村で二人の子どもが泥遊びをしているのを見て、立てる方法を悟った。その子どもは、文殊、普賢菩薩の化身であった。

事蹟碑には光宗十九年を己巳年と記すが、光宗十九年は戊辰年であり、不正確である。三十七年かけて丙午年にでき上がったとすると、己巳年（九八九）の方が近く、それは光宗二〇年にあたる。その翌年から造り始め、足掛け三十七年で完成した計算となる。事蹟碑そのものが約七百五十年も経ってからのものなので、制作年代については、およそ光宗十九年（九六八）の翌年から三十七、八年という長い年月をかけて制作されたと伝えられていたと理解するにとどまる。

「大きな石が地上に湧き出た」ので仏像をつくるに至ったということからは、我が国の當麻曼荼羅縁起絵巻に描かれた石光寺の縁起を思い出させる。さらに、文殊、普賢菩薩の化身である童子の助けがあったことも、化人の助けて曼荼羅を完成したと伝える當麻曼荼羅縁起と共通する。光明寺本當麻曼荼羅縁起絵巻の詞書には、蓮糸を染める井戸を掘ったところ水があふれ出た奇蹟が、昔、天智天皇の時代の奇蹟を思ふと記される。その井戸のほとりに、毎夜光を放つ石があり、勅使

がそれを見ると石が仏像の形をしていた。そこで弥勒三尊像に彫刻して、堂宇をつくり、染寺とした。この話は「當麻曼陀羅疏」「和州極樂曼陀羅縁起」にも、蓮糸を染めた井戸の地である石光寺の由来として、石光寺が奇蹟によつてできた話として記されている。

このことは即ち、仏像を造ろうとして石材を調達したのではなく、仏像になるべき石がまずあり、その石が見つげられたことから仏像がつくられたということなのである。石そのものに仏像となるべき要素が備わっていると感じられたのだ。このように素材そのものに、靈性があり、素材自体が仏像を生み出すという考えは、石だけではない。日本では、木の場合によくみられる。立木仏がそれである。我が国の代表的な遺例として、日光中禅寺の千手観音像（平安時代後期）や奈良法起寺十一面観音像（平安時代前期）などがあげられる。立木仏とは、古来からある霊木信仰にもとづき、霊木から化現する仏像をいう。したがってその表現は、本来の霊木である状態を損なわない形となる。根から離して、材木として彫刻する場合もあるが、それでも形から立木であったことが窺える程度の造形である。つまり必ずしも写実的であったり、バランスのよい造形である必要はない。最小限の手を加えるだけなのである。

同様なことが石像でも言えよう。その好例として、韓国京畿道坡州磨崖仏（図5）があげられる。大きな自然の岩の形を活かして彫刻された、寄りそう二軀の仏立像であり、自然の岩壁に体部を溶け込ませるように彫り、丸彫の頭部をのせている。同じように岩壁に体部を彫り、頭部には別石を彫刻してのせる慶尚北道安東市泥川洞の磨崖仏なども岩から化現した仏像と見てよいと思う。また、慶州市堀仏寺の四面石仏も、とくに西面阿弥陀三尊像は岩から化現したと考えてもよい



(図5) 坡州龍尾里石仏

かもしれない。すると、灌燭寺菩薩像のほとんど抑揚がなく、塊のよ
うな体部の表現も、地中から湧き出た靈石から化現する仏像と考えれ
ば、むしろ必然的な造形と思える。

②の仏像のようすは、非常に大きい灌燭寺菩薩像の大きさを記す。
身長五十五尺五寸とあるが、『新增東国輿地勝覽』では五十四尺と記
す(注7)。現状では一八・二メートル(五十九尺八寸)と報告さ
れ、それぞれの数値が何処を基準に測ったのかはわからない。事蹟碑
には、その他、囲三十尺、耳長九尺、眉間六尺、口角三尺五寸、火光
五尺、冠高八尺、大盖方広十一尺、小盖六尺五寸、小金仏三尺五寸、
蓮華枝十一尺で金色に塗られているとあり、詳しい大きさの記述から、
この像の格別な大きさが伝わる。宝冠の上に大きな四角い宝蓋(蓋)
を二段にかぶっていること、また、小金仏とあることから当時は化仏
を戴いていたであろうことがわかり、さらに現状と同じく蓮華枝を持
っていたと知れる。ここで現状と異なるのは化仏の存在である。この
化仏は、一九〇九年、日本人グループが背後の丘に登って盗んだと伝

えられる(注8)。この化仏の存在から、灌燭寺菩薩像は本来観音像
として祀られたとする有力な説もある(注9)。また、火光五尺とあ
る「火光」が何を指すのかわからない。

三、高麗時代の石造仏

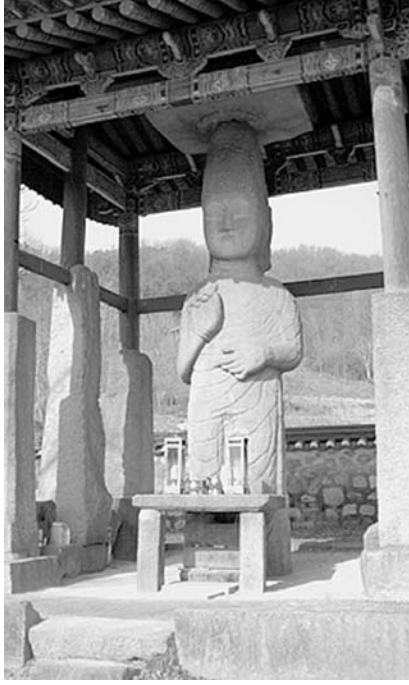
事蹟碑のここまでの記述から、非常に大きい灌燭寺菩薩像が地中か
ら湧き出た靈石から化現した像であることが出来る。このよう
な巨大な石像や、地中あるいは池中から出現したようにみえる石像を、
金三龍氏は弥勒信仰によるものと解釈した。なかでもとくに下半身が
地下に埋没している像を「下体埋没仏」と名付け、韓国内に特徴的な
弥勒信仰による造形とした(注10)。この考え方は、正木晃氏も踏襲
し(注11)、菊地章太氏は同じ形を地上出現仏と呼び、基本的には同
じ考え方で捉えている(注12)。

金三龍氏は『韓国弥勒信仰の研究』の中で、高麗時代以来民衆の間
に定着した弥勒信仰による石造弥勒の造像は、朝鮮時代の排仏期には
屋外の石造弥勒仏への民間信仰として民衆の間に盛んになったと述べ
た。その特徴を

- (a) 屋外仏という点
 - (b) 立仏という点
 - (c) 石造仏という点
 - (d) 南向きであるという点
 - (e) 大作仏の例が多いという点
- の五点と捉え、この特徴があれば、本来は弥勒ではなくとも弥勒とし
て信仰されるとした。

この特徴の設定は聊か乱暴といえるが、朝鮮時代から現代まで続く

民間信仰的な弥勒信仰の一面はあらわしている。屋外仏という点は、本来寺院の堂宇の中に祀られていたが、戦乱や災害、朝鮮時代の排仏などの影響で堂宇、そして寺院そのものが破壊され、廃絶した場合、石仏だけが残り、それを民間で弥勒として信仰している場合が多いので、屋外仏であることが弥勒像の特徴であるとするのは難しいであろう。たとえば、後で述べる中原弥勒大院では、礎石が確認され、木造架構があったことが明らかである。あるいは、京畿道安城郡二竹面の通称太平弥勒(図6)は屋外にあったものが、近年保護屋蓋が造られたものである。しかし、像を囲む石材には相当古いものがあり、当初から何らかの建物があったと考えられる。ことさらに屋外だからという理由で信仰することはありえないので、石造弥勒の特徴として、屋外仏というのは相応しくないと考える。



(図6) 安城郡二竹面石仏

次に(b)以下の特徴について検討する。

灌燭寺菩薩像が造られた高麗時代には、非常に多くの石仏が制作された。現在まで伝わるそれらの像の大半は弥勒として信仰されていて、

今でも参詣の人が絶えないものが多い。このことは金三龍氏の考察の通りであるが、私は今回はとくに高麗時代の特徴を明らかにする目的のため、高麗時代に制作された石仏に限って考察の対象とした。金三龍氏は三国時代から現代に至るまで網羅して調査されたが、その作成されたりリストをもとにして、高麗時代の弥勒石像を列挙したものが、【表】である。これは、高麗時代に造られた石仏(磨崖仏を含む)のうち現在弥勒として信仰されているものを列挙したもので、明らかに他の尊格であったり、弥勒かどうかかわからないものも含んでいる。備考欄の×は、写真も手に入らず像容が確認できなかったものである。寺名はとくに弥勒に関わる龍華寺というような寺名の場合に付記した。また、私が調べた限りでも金三龍氏の調査にいくつか追加したので、おそらくまだ不十分だとは思いますが、今回はこの表をもとに考察する。

高麗時代の石造弥勒像は全部で二一六例を数えるが、忠清南道と全羅北道が四〇例ともっとも多く、続いて京畿道が三二例、忠清北道が二五例である。全羅南道二二例、慶尚北道二〇例、慶尚南道一七例、江原道八例となり、地域的な偏りが見られる。忠南、全北、京畿、さらに忠北、全南と、基本的には百済の故地を中心としている。慶尚道には弥勒谷の如来坐像、三花嶺の弥勒三尊像など慶州を中心とする地域に数多くの石仏があるので、作例が少なく見えるのは、その多くが統一新羅時代以前の造像になるので、この表から省いたからである。

次に、全体で立像が一五九例であるのに対し、坐像は六〇例、半跏像が二例と、立像が圧倒的に多い。慶尚道では三七例中坐像が二二例で比較的坐像が多いが、慶尚道以外では立像が八割を越す割合である。また、如来の割合が高く、一四七例であり、菩薩は二二例と明らかに有意差がある。菩薩が少ないなかでも、とくに慶尚道には少なく三例

に過ぎず、逆に京畿道六例（約二割）、忠清南道九例（約二割強）と百済の故地では比較的多いといえよう。ここで、第二番目に上げられた立仏が多いという特徴が確認できた。灌燭寺像は立仏という特徴はあたるが、如來ではなく菩薩である。百済の故地では比較的菩薩の造像もある。灌燭寺像は決して例外というわけではない。

表の「その他・備考」欄に「下体埋没」と記したが、これが章の始めに述べた「下体埋没像」のことである。金三龍氏は「調査結果、下体埋没仏は二四個出たが、その中、高麗時代のものは十八個で約八十%を占めている。特に高麗時代の下体埋没仏があらわれた地域の中で当時農民の乱など社会的混乱が非常に激しかった忠清道地域と慶尚道地域に半分以上が存在しているという点と、末法救済と弥勒下生の出現関係をよくあらわしている現象であると思う。」と述べている（注13）。正木晃氏、菊地章太氏がこの考えを踏襲しているので、一見この解釈が定着しつつあるようにみえる。

しかし私は、弥勒下生信仰による造形という視点を否定するものではないが、「下体埋没仏」というものがそもそも存在していたかどうか疑わしいと思っている。韓国では、寺院や石仏を山地に造営することが多いので、階段状に伽藍が展開することがよくある。その場合、何らかの事情で寺院が廃絶すると、石仏の下半身が埋まってしまうことがある。仏像が安置されている面より上の段のレベルまで土で埋まると、仏像の下半身は埋まってしまうことになる。また、朝鮮時代の排仏時に人為的に埋められた可能性も考えられる。

たとえば、忠清北道中原郡の弥勒大院の高さ十メートルにもおよぶ石造弥勒如来立像（図7）は、寺の創建時には人工的な崖を背に木造架構を造り、石窟寺院のようなところに祀ってあった。発掘調査によ



（図7）中原弥勒大院本尊石仏



（図8）牙山郡松岳面薬師如来立像

り大規模な寺院が確認されているが、元軍の度重なる攻撃にあい、荒廃したとみられている。荒廃した後、如来立像は崖の高さほどまで埋まった状態になったが、現在では発掘され、全身を現している。忠清南道牙山郡松岳面の薬師如来立像（図8）も下半身の石の色が違うことからわかるように、かつては下半身が土中にあった。現状から推測すると、この像も階段状の伽藍に祀られていたと考えられ、像の台

座と同じレベルに礼拝石があり、造立当初は全身像を拜んでいたとわかる。中原弥勒大院と同じような経過で埋まったものとみられ、決して下体埋没を当初から意図した形式ではなかった。忠清南道唐津郡貞美面の三尊像も中尊は膝から下程度だが、両脇侍は太ももより下が埋まっていた。現在発掘調査中で、台座まで露出したが、中原の弥勒大院のように階段状の伽藍であったようだ。安国寺銘の瓦も出土している、やはり相当の寺院であったと推察できる。このような例があるので、制作当初から地面に埋めて祀ったとは考えられず、下体埋没が弥勒下生をあらわしたとするのには無理があるろう。

(c)の石造仏であることについては、戦乱や災害の被害を大きかった韓国においては、石仏がもつとも残りやすい素材であったので、石仏が多いのは当然である。おそらく、高麗時代当時の石仏の造像数も相当多かったと想像できるが、高麗時代後期には金銅仏も多いので、割合的に大きいとは断言できない。また、(d)の南向きであることは、必ずしもそうではなく、灌燭寺の場合は東向きであり、弥勒大院は北向きであり、地形や造像の目的に合った方向に祀られることも多いようだ。

(e)の大作仏の例が多いことは、高麗時代の石仏の一つの特徴である。灌燭寺の像も十八メートル以上の巨大仏である。灌燭寺像ほどの大きさは特例としても、三メートル以上、四、五メートルの像は数多くあり、丸彫だけに限っても五二例あり、とくに京畿道と忠清南道に多い。

弥勒の下生を説く「弥勒下生成仏経」や「弥勒大成仏経」などには、遠い未来に理想的な国土があり、そこに転輪聖王が出世する、その時バラモンの夫婦に弥勒が生れ、出家して龍華樹下で悟りを開き、龍華

の三会で釈迦の救済にもれた人々を救うとされる。弥勒の登場には、人間の寿命が八万歳になり、理想の国土が出現することが前提であり、理想の国土に転輪聖王が出世することも前提である。そして、弥勒出現の時の人間の身長は一六丈、弥勒はその二倍の三二丈、あるいは誇張して千尺ともいわれ、釈迦より大きい。また、作例としての大仏については、「巨大仏はインド周辺地域から中央アジアにおいて出現し、中国で多く造像され、その多くは弥勒像である」(注15)といわれる。中国では弥勒下生信仰が盛んになり、弥勒はたんに未来の仏陀ということとどまらず、転輪聖王という理想的な王権と結びついて、聖俗両界において理想世界を実現するユートピアの象徴として信仰された。現実の王権と結びついて理想世界を達成するとされるので、弥勒が交脚や倚坐という王者風の姿勢をとったり、宝冠をつけて皇帝の姿に擬したりするのも、このためと考えられている。

このように、弥勒ならば巨大な像であるのは当然であり、おそらく韓国においても同様な思想が受け継がれたのだろうと推測できる。たとえば、古新羅の断石山神仙庵の磨崖仏はその例であり、銘文から弥勒如来であるとわかる。百済の益山弥勒寺は池に弥勒三尊が出現したことから創建された大寺院である。このような三国時代の巨大な弥勒仏の造像は、中国で展開した巨大仏の思想、巨大な弥勒のユートピアへの憧れに大きな影響を受けたとみて間違いない。しかし、同じ巨大仏でも三国時代と高麗時代では年代的にかけ離れている。

灌燭寺の石造菩薩立像は、現在は小高い崖に囲まれた窪地に立つ。かつてはそこに水を流していたという見方もあり(注16)、そうだとすると益山弥勒寺の草創伝説と同じように、池から弥勒仏が出現したように見えたのであろう。その見方は、事蹟碑⑤に乾隆庚申(一七四

○)に「石堞兼於床卓亦皆一新云爾」と記された修理で、現在蓮華唐草文を浮彫にした七枚の石板が、本来蓮池の壁だったと解したのである。しかし、私には池、あるいは水流があったとする根拠を見出せない。池があつたとは思えない。現状から判断するかぎりでは、菩薩像が水面にいる状態を表す蓮華や荷葉の台座に立っているのでもなく、像の周囲の大きな自然石を池底とみるのには無理がある。背後の石積み下部に排水設備があつたという中原の弥勒大院のように、背後に崖を背負う灌燭寺像の場合も何らかの排水設備は必要だったかもしれない。

池中に立つのではなくとも、灌燭寺菩薩像の形は頭部の比率が異様に大きく、下から上へのムーブメントを感じさせるものなので、出現する仏陀とみることも可能である。つまり、水面に現れたり、下体埋没仏とすることはできないが、出現する仏陀とみることができ。その尊格は巨大であることも鑑みて、弥勒である可能性が高い。灌燭寺菩薩像にはかつて化仏があつたことから観音の可能性も捨てきれず、ここでは断言しがたいが、少なくとも巨大で、出現するようすを表している「出現する仏陀」である点では、下生する弥勒であることを指している。三国時代の弥勒下生信仰による造形と直接つながるとはいえないが、同じような信仰による造形が高麗時代にもあつたといえるのではなからうか。

後三国時代には弓裔が僧衣を着け、自らを弥勒と称し、世俗の権威と弥勒が結びついた例がある。つまり、統一新羅時代末期には弥勒下生を待ち望む信仰は存在していたので、弓裔が登場したのである。高麗時代に入ってから弥勒下生信仰が存続し、灌燭寺菩薩像のような巨大な仏像がつくられる素地があつたと考えられる。

四、篤い信仰

事蹟碑の内容の③では、東向きに立つ菩薩像の白毫から光を発し、中国僧智眼がそれを拝し、その光は灌燭という名に相応しいと言ったことから、灌燭寺というたとえられる。白毫から発する光に導かれて、遠くから菩薩像を拝した。灌燭寺の菩薩像は遠くから拝すことを想定して、大きな顔にくつきりと大きな目鼻をつくつたのである。

続いて④では、この菩薩像は、国家が太平であると光と瑞気に満ちあふれ、凶乱の時には身体から汗を流し、花の色があせると言われているように、国を守る像であるとする。鴨緑江を渡って敵が攻めようとして集結していたとき、僧が衣を着て笠をかぶり、浅瀬のように川を渡るのを見て、敵将はそこが浅いと思い、進軍させた。ところが川は深かったので敵軍の兵は多数溺れてしまった。怒った敵将は僧に斬りかかったところ、笠が斬れた。それが現在の灌燭寺菩薩像の宝蓋である。僧は菩薩の化身であつた。宝蓋には今もその時の傷跡がある(図9)。このような霊験譚が伝えられ、事蹟碑にも記録され、人々の



(図9) 灌燭寺菩薩像宝蓋傷跡

記憶に刻まれたのだ。

だからこそ、その後の修理も重ねることができ、多くの寄進者も存在するのだ。現在でも参詣の人々が絶えず、菩薩像の前には礼拝の石敷が広くしつらえてある。礼拝のための施設は、各地の屋外の石造弥勒像の前につくられ、現在も民間の信仰が篤いことがわかる。

礼拝のための施設は、仏像の前の石敷だけではなく、現在は灌燭寺に代表される形式といえる、窓から仏像を臨む形式の礼堂が造られている。大鳥寺やソウル郊外の僧伽寺など、屋外にある石仏を礼拝するための窓を備えた礼堂が多くの寺にある。本来自然の中にあつた霊石への信仰が根底にあるので、石仏を祀る堂宇の必要性が小さいのかもしれない。

以上見てきたように、巨大な灌燭寺石造菩薩立像は道行く人が遠くからも見守られていると感じられるように、大きく、わかりやすい(大まかな)造形で造られている。そして、素材である石そのものに霊的な意味がある、ある種の自然崇拜による霊石信仰があつたので、その造形はもとの石の霊性を壊さない程度の大まかな造りであることが必然であつた。それは、事蹟碑にかかれた説話にあるように、地中から湧き出た石であつた。そこに仏陀が出現するようすを連想することも許されないだろうか。このような霊石信仰に基づく灌燭寺菩薩像の特色は、高麗時代に数多く造られた巨大石仏全体の特徴のひとつともいえよう。

- 注1 東京成徳大学人文学部国際言語文化学科教授金恩典氏談
- 注2 黄壽永『韓国^의仏像』文藝出版社・一九八九
- 注3 小学館刊『世界美術全集 東洋編四 高句麗・百濟・新羅・高麗』内藤浩之「石窟庵以後と高麗の仏教彫刻」
- 注4 崔聖銀・郭東錫著 片山まび・芹生春菜訳『韓国の仏像』図書出版 藝耕・二〇〇四
- 注5 崔善柱「高麗初期灌燭寺石造菩薩立像에 대한 연구」『美術史研究十四』二〇〇〇
- 注6 灌燭寺事蹟碑 朝鮮英祖十九年癸亥(朝鮮金石総覧 下)朝鮮総督府編・一九一九
- 注7 稽古高麗光宗之十九年己巳沙梯村女採蕨宇盤葉山西北隅忽聞有童子声俄而進見則有大石從地中聳出心驚怖之歸言其女婿即告于本縣自官覈奏上達命百官會議啓曰此必作梵相之兆也令尚醫院遣使八路敷求掌工人成梵相者僧慧明心拳朝廷擢工匠百余人始事於庚午訖功於丙午凡三十七年也・以下二十六行続く
- 注8 『新增東國輿地勝覽』朝鮮中宗二十三年(一五二八)新增改訂(國書刊行会・一九八六) 恩津仏宇條 灌燭寺 在般若山有石弥勒高五十四尺世伝高麗光宗朝盤若山麓有大石湧出僧慧明珠成仏像○李穡詩馬邑之東百余里市津縣中灌燭寺有大石像弥勒尊我出我湧從地巍然雪色臨大野農夫刈稻克檀施時流汗驚君臣不独口傳藏国史
- 注9 『灌燭寺遺跡記』竹若文人協会・一九四九
- 注10 黄壽永(注2)前掲書、『國宝』卷四 石仏・竹書房・一九八五(日本語版)
- 注11 金三龍『韓国弥勒信仰の研究』教育出版センター(日本語版)・一九八五
- 注12 正木晃「造仏による仏教の受容と変容 五 韓国編」『講座仏教の受容と変容』所収・校正出版社・一九九一
- 注13 菊地章太「弥勒信仰のアジア」大修館書店・二〇〇三
- 注14 金三龍(注10)前掲書
- 注15 宮治昭「弥勒と大仏」『涅槃と弥勒の図像学』吉川弘文館・一九九二
- 崔善柱(注5)前掲論文

本稿は、平成一五(一七)年度科学研究費基盤研究(C)一般の補助金による成果の一部である。

【表】高麗時代の石造弥勒

所在地	尊格	姿勢	服制	板状の冠	高さ・cm	その他・備考
京畿道安城郡三竹面竹山里	如来	立	通肩		198	×
安城邑楽園洞	如来	坐	偏袒右肩		150	× (智拳印)
大徳面長々里	如来	坐	通肩	なし	350	宝珠
二竹面梅山里	如来	立	通肩	なし	336	
〃	菩薩	立	偏袒右肩	○	560	太平弥勒
大徳面大農里	如来?	立	通肩	○	236	水瓶 下体埋没
三竹面基率里	如来	立	通肩	○	479	
〃	如来	立	通肩	○	535	
安城邑峨洋洞	菩薩	立	通肩	なし	246	下体埋没
〃	菩薩	立	上半身裸形?	なし	292	下体埋没
広州郡西部面草一面	如来?	立	通肩?	なし	136	
草月面武甲里	如来	坐	通肩	? 頭頂扁平	141	
西部面春宮里					135	× 磨崖仏
利川郡雪星面白石一里	如来	立	通肩	○		龍華寺
長湖院邑於石里	如来	立	通肩	○	412	
利川邑官庫里	如来	立	通肩	なし	407	弥勒洞
大月面大甫里	如来	立		なし	232	弥勒洞
麻長面長岩里	菩薩	半跏		なし・高冠	320	蓮華枝・太平興国銘 (981)
竜仁郡遠三面弥坪里	如来	立	通肩	○	401	
驪州郡大神面上九里	如来?	立	通肩	なし	260	龍華寺
占東面清安里	如来	立	通肩	なし	310	
興川面桂信里		立	通肩		280	×
華城郡東灘面梧山一里	菩薩?	立	通肩	頭部破損	204	弥勒洞
水原市牛満洞		坐	通肩		164	×
楊平郡介郡面上紫浦里	如来	立		なし	450	磨崖仏
抱川郡郡内面舊邑里	菩薩?	立	通肩	○ 高冠	300	龍華寺
始興郡果川面文原四里		立				×
安養市安養一洞		立	通肩		415	× 龍華寺
坡州郡広灘面竜尾里	如来	立	通肩	○	1740	
ソウル市恩平区鎮官外洞		立	通肩		302	× 磨崖仏
城北区域北洞	如来	立	偏袒右肩	なし	210	合掌?
江西区開花洞	如来	立		○	330	
江原道寧越郡水周面武陵3里	如来	坐	通肩	○	360	
原城郡貴米面周浦里	如来	立		なし	10m以上	磨崖仏
所草面平庄里	如来	坐		なし	346	磨崖仏
〃	供養者			なし	102	磨崖仏
興業面梅芝2里	菩薩	立	通肩	なし	235	
洪川郡洪川邑津里	如来	立	通肩	なし	208	
華川郡看東面竜湖里	如来	坐	偏袒右肩	なし	110	頭部破損
江陵市玉川洞	如来	立	通肩	なし	180	
忠清北道忠州市牧杏洞		立			184	×
竜灘洞	如来	立		○	181	
清州市社稷洞	如来	立	通肩	なし	171	
中原郡可金面妙谷里		立				×
上毛郡弥勒里	如来	立	通肩	○	1060	
可金面倉洞		立			170	×
〃	如来	立	通肩		500	磨崖仏
新尼面院平里	如来	立	通肩	○	405	
松岩里	如来	立	通肩	○	362	
堤原郡寒水面徳周寺	如来	立	通肩		1400	磨崖仏
鎮川郡鎮川邑新井里	如来	立	通肩	○	730	龍華寺
永同郡黄金面新安里	如来	立	通肩	なし	218	
槐山郡曾坪邑南下里	?	立	通肩	高冠	344	蓮華?
弥岩里	菩薩	立		高冠・化仏	256	
道安面光徳里	如来	立	通肩	なし	376	
堤川郡松鶴面長谷里	如来	立	通肩		175	浮彫
寒水面駅里		立			163	×
鳳陽面明岩里	如来	立	通肩	なし	199	
清原郡梧倉面槐頂里		立			220	×

南二面文東里	坐	通肩		148	×	智拳印
佳佐里	坐	偏袒右肩		96	×	
上鉢里	坐	偏袒右肩		91	×	降魔触地印
丹陽郡丹陽邑高坪里	坐			93	×	
大岩面竜福院	立			83	×	破損
堤川市頭鶴洞	立	通肩		165	×	下体埋没
忠清南道論山郡夫赤面徳坪里	如来	立	通肩	なし	200	下体埋没
新豊里	如来	立	通肩	なし	200	合掌 磨崖仏
連山面連山里	如来	立	通肩	○	423	
天護里	三尊	立			337・361・401	開泰寺
恩津面灌燭里	菩薩	立	通肩	○	1812	灌燭寺
上月面上道里	如来	立		なし	610	磨崖仏 竜華寺址
豆腐面神道内	如来?	立		なし	280	浮彫・竜華寺
牙山郡松岳面坪村里	如来	立	通肩	なし	550	葉壺(合子)
外岩里	如来	立	通肩	なし	285	
〃	如来?	立	通肩		220	頭部後補
屯浦面松容里	如来	立		○	215	
霊仁面薪峰面	如来	立	通肩	なし	390	竜華寺
新々里	如来	立	通肩	○	225	
牙山里	如来	立		なし	315	
〃	如来	立	偏袒右肩	なし・光背	217	
燕岐郡東面松竜里	如来	立	通肩	なし・光背	256	
南面羅城里	如来	立		なし	245	
天原郡木川面東里	如来	立	通肩	なし	383・260	
修身面長山里		立	通肩		190	×
豊歳面三台里	如来	立	通肩	なし	710	磨崖仏
礼山郡徳山面邑内里		立		○	170	下体埋没
新坪里		立			270	×
挿橋邑新里	菩薩	立	通肩	○	549	
瑞山郡海美面 ^ハ 陽里	菩薩	立		なし	217	
雲山面余美里	菩薩	立	通肩	なし	308	
竜賢里	菩薩	立		なし	233	
音岩面新莊里	如来	坐		なし・光背	127	
地谷面蓮花里		立			180	×
洪城郡結城面無量里		立			188	×
洪城邑玉岩里		立			105	×
竜鳳寺サハリ	如来	立	通肩		700	
青陽郡青陽邑邑内里	三尊	立	通肩	なし	290・226・230	
定山面西亭里		坐			102	×
保寧郡熊川邑珠山		立			206	×
青羅面聖住寺址	如来	立		なし	213	×
大川邑内項里		立			387	
大徳郡鎮岑面城北里		立			225	
扶余郡林川面旧校里	菩薩	立	通肩	○	1650	蓮華枝 大鳥寺
唐津郡貞美面寿堂里	三尊	立		○	489	
汚川面城下里	如来	坐	通肩	なし	275	高浮彫
全羅北道井州市上洞	如来	坐	通肩	なし	455	
蓮池洞	菩薩	立	通肩	なし	258	
南原市新村洞	如来	坐	偏袒右肩	なし・光背	204	
長水郡山西面元興里	如来	立	通肩	なし	315	
梧山里	如来	坐		なし・光背	210	
沃溝郡聖山面倉梧里	如来	立	偏袒右肩	○	159	
扶安郡杏安面松汀里	如来	立	通肩	○	424	
井邑郡七宝面武城里	如来	立	通肩	なし	315	下体埋没
徳川面望帝里	如来	立	通肩	○	390	
梨坪面山梅里	如来	立	通肩	なし	246	
所声面古橋里	如来	立	通肩	なし	145	
古阜面竜興里	如来	立	偏袒右肩	なし	167	
合貞部落	如来	坐	通肩	頭部欠	137	智拳印
所声面鳳陽里		立	偏袒右肩		167	×
淳昌郡淳昌邑佳南里	如来	立	通肩	なし	175	線刻
仁溪面八鶴里	如来	立	通肩	なし	220	

亀林面安亭里	如来	立		なし・光背	198	
仁実郡壬実邑	如来	坐		なし・光背	142	
三溪面石門洞	如来	立	通肩	なし	156	下体埋没
南原郡松洞面細田里	如来	立	通肩	なし	345	
沙村里	如来	立	通肩	なし・光背	320	
松内里	如来	立		なし・光背	265	
徳果面沙栗里	如来	坐		頭部欠	173	
朱川面新村里	如来	坐	偏袒右肩	なし・光背	125	
竜潭里	如来	立		なし・光背	56	
朱川面漁々里	如来	坐		なし・光背	161	触地印
〃		立	通肩		173	×
南原邑鷲岩里		立	通肩		186	×
水旨面考坪里	如来	立	通肩	なし・光背	203	
宝節面真基里	如来	坐			79	×
二白面科笠里		立		なし・光背		
南原邑池堂里	如来	立	通肩	なし・光背	335	
二白面孝基里	如来	立	通肩	なし・光背	178	
益山郡金馬面東古都里	?	立		○	424	
金堤郡金堤邑新谷里	如来	立	通肩	なし	155	下体埋没
聖徳面妙羅里		立	通肩		145	×
高敞郡雅山面三仁里	如来	坐	通肩		500	磨崖仏
星松面茂松里	如来	坐		なし・光背	180	
全州市麟後洞	如来	立	偏袒右肩	なし	260	
益山郡八峰面德基里	如来	立	通肩	なし	159	
全羅南道昇州郡住岩面沙浦		立		なし	375	
高興郡道化面鳳竜里	如来	立	通肩	なし・光背	200	
鶴谷里		半跏			270	×
金城市松賢洞	如来	坐		なし	110	
大護洞	如来	坐	通肩	なし・光背	140	
潭陽郡古西面分香里	如来	立		なし	268	
金々里	如来	坐	偏袒右肩	なし・光背	250	触地印
武貞面成都里	如来	立	通肩	なし	167	
梧竜里	如来	立	通肩	○	238	
古西面改善里	如来	立	通肩	なし	175	
金城面下城面	如来	立	通肩	なし	270	
海南郡三山面舊林里	如来	坐	通肩	なし	420	磨崖仏 竜華寺
珍島郡郡内面竜藏里	如来	坐	通肩	なし	200	
連山里	如来	坐	通肩	なし	350	磨崖仏
寒山里	如来	坐		なし		
谷城郡石谷面竹山里	如来	立		なし・光背	300	
長城郡北二面院徳里	如来	立		○	295	
三溪面林谷	如来	立	通肩	なし	181	
康津郡城田面月下里	如来?	立		なし・光背	215	
靈光郡仏甲面建武里	如来	坐		なし・光背	242	
長興郡安良面岐山里	如来	坐		なし・光背	230	
長平面塔洞	如来	坐		なし・光背	260	
羅州郡鳳皇面鉄川里	如来	立	通肩	なし・光背	538	
〃	如来			なし		
老安面永平里	如来	立	通肩	なし		
靈岩郡郡西面道甲里	如来	坐	偏袒右肩	なし	300	触地印
鶴山面鶴溪里	如来	立		なし	356	
徳津面永保里	如来	立	通肩	なし	209	下体埋没
求礼郡沙道里		坐	偏袒右肩		125	×
務安郡務安邑城東里		坐	通肩			×
光州市上武洞	如来	坐	偏袒右肩	なし	410	磨崖仏 智拳印
濟州道濟州市竜潭洞	如来	立		○	290	竜華寺
建入洞	?	立		なし	290	
慶尚北道宋豊郡丹山面玉帯里	菩薩	立	偏袒右肩	なし	121	下体埋没
浮石面林谷里		立			110	×
高靈郡雲水面大坪二洞	如来	立	通肩	なし・光背	135	下体埋没
開津面開浦里	菩薩	坐		なし・光背	146	蓮華枝・浮彫・雍熙2年銘
義城郡龜川面内山里		坐	通肩		165	×

多仁面徳弥里	如来	坐	通肩	なし	72	智拳印
丹北面孝堤里	如来	立	通肩	なし	158	下体埋没
舎谷面孔亭1洞	菩薩	立		なし・高冠	170	
新平面中栗洞	如来	坐	通肩	なし	76	触地印
安平面金谷2洞		立			110	×
倉吉3洞	如来	坐	通肩	なし	110	
奉化郡鳳城面鳳城1里	如来	立	通肩	なし	360	
春陽面宜陽里	如来	立	通肩	なし	235	
永川郡臨臯面孝洞	如来	立坐坐		なし	113・119・50	
安東市泥川洞	如来	立		なし	1243	磨崖仏・頭部別石
尚州郡伏竜里	如来	立	通肩	なし	147	
聞慶郡聞慶邑観音里	如来	立	通肩	なし	290	
〃		坐		なし・光背	210	思惟？
〃		坐	偏袒右肩		117	×
清道郡梅田面温幕洞	如来	坐	通肩	なし	110	触地印 下体埋没
慶尚南道昌寧郡都泉面松津里	如来	坐	通肩	なし・光背	214	
靈山面九溪里	如来	坐		なし・光背	155	
昌寧邑木吃里	如来	立		なし・光背	129	
金海郡進礼面藁田里	如来？	坐		なし・光背	130	
居昌郡馬利面木吃里	如来	坐		なし	146	
北上面農山里	如来	立	通肩	なし・光背	216	
陝川郡鳳山面鴨谷3区	如来	立		なし	140	
河東郡玉宗面青龍里	如来	坐		なし	109	触地印
泗川郡西浦面舞鼓里	如来	坐	通肩	なし	189	触地印
固城郡固城邑校舎里		坐	偏袒右肩		120	
晋陽郡奈洞面内坪里	如来	立		なし・光背	125	
統營郡光道面林外	如来	坐	偏袒右肩	なし	152	
密陽郡武安面	如来	坐	偏袒右肩	なし・光背	126	
清道面九奇里		坐			78	×
ウ州郡華北面川田里		坐	偏袒右肩		127	×
江東面於勿里		坐				磨崖仏
咸陽郡馬川面	如来	立	通肩	なし・光背	580	

金三龍『韓国弥勒信仰の研究』教育出版センター（1985）などより